

## 第1回北しりべし定住自立圏共生ビジョン懇談会会議録

日 時 平成22年7月5日(月)午後3時～午後5時  
場 所 小樽市民会館2階11号室  
出席委員 澤田会長、斎田副会長、阿久津委員、並木委員、伊澤委員、三浦委員、赤間委員、岡田委員、井上委員、小笠原委員、杉本委員、山田委員、清水委員、佐々木委員、二川委員、若松委員 (欠席 長川委員、播磨委員)  
オブザーバー 小樽開発建設部、積丹町、古平町、仁木町、余市町、赤井川村  
事務局 迫企画政策室長、上石主幹、澤里主査

### 1. 開 会 (午後3時)

(司会) 本日はご多用のところ、北しりべし定住自立圏共生ビジョン懇談会にご出席いただきましてありがとうございます。只今より、第1回北しりべし定住自立圏共生ビジョン懇談会を開催いたします。本日の会議は、お手元の次第に沿って進めさせていただきますので、よろしく願いいたします。会議の時間は、おおむね2時間を予定しています。

### 2. 委員の委嘱状交付

(市長から、各委員に対し委嘱状交付)

### 3. 市長のあいさつ

(市長) 小樽市長の山田でございます。これまでの経過も含めまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は大変お忙しい中をご出席いただきまして、大変ありがとうございました。そしてまた、皆様にはこのたび懇談会の委員をお引き受けいただきまして、まことにありがとうございました。心からお礼申し上げたいと思います。

この定住自立圏構想でありますけれども、これは、国が平成の大合併をふまえて2008年の5月に、今後の自治体連携のありかたを示したものであります。地方圏の人口の減少、さらには高齢化の現状をふまえて、なお残る小規模町村を支えるために広域連携が必要であるということでございまして、人口定住のために必要となる生活機能を確保するために、中心となる都市、いわゆる生活機能を有する中心都市を中心に、周辺町村が連携あるいは役割分担をしながら、地方圏で安心して暮らすことのできる地域を再生しようという趣旨でございます。

そこで小樽市が、昨年9月に「北しりべし定住自立圏」の形成に向けて中心市宣言を行い、積丹町、古平町、仁木町、余市町、赤井川村の北後志5町村と適切な役割分担のもと、魅力あふれる地域づくりを目指すことを表明したところでございます。その後、具体的な取り組みについて協議を積み重ねてまいりまして、さらに議会の手続きも経まして、本年4月に、小樽市とそれぞれの町村とが1対1の協定を締結したところであります。

定住自立圏を形成するにあたっては、圏域全体の将来像や将来のありかた、取り組みの詳細内容をまとめた共生ビジョンを策定することになっておりまして、その策定にあたり、関連する分野の関係者や住民等を構成員とする懇談会を設置し、内容を審議していただくこととなっております。

ます。北しりべし定住自立圏を構成している市町村が互いに連携し協力しあい、一体となってこの定住自立圏構想を進めることは、必ずや圏域の住民が安心して末永く定住できる、魅力あふれる地域づくりに繋がるものであると期待しているところでございます。

委員の皆様におかれましては、どうか活発なご意見を賜りますようお願い申し上げます、ご挨拶いたします。よろしくお願いいたします。

#### 4. 「北しりべし定住自立圏共生ビジョン懇談会」の設置要綱について

(司会) 会長及び副会長が選任されるまでの間、当懇談会を運営する上での基本的な事項を規定しました設置要綱について、事務局から説明いたします。

(事務局説明 資料2)

#### 5. 会長及び副会長の選任

(司会) 続きまして、当懇談会の会長及び副会長を選任したいと存じます。

会長及び副会長が決まるまでの間、私が進行させていただきます。会長及び副会長につきましては、先ほど懇談会設置要綱第5条に基づき、委員の互選によって定めることとなっております。どなたかご意見ございませんか。

(委員) 事務局としての案はあるのですか。

(司会) 会長については、全体的見地から会議をまとめる役ですので、今回学識経験者として選出されている、小樽商科大学の澤田教授が適任と考えております。副会長については、小樽商工会議所企画政策委員会の斎田委員が適任と考えております。皆様いかがでしょうか。

(「異議なし」の声)

(司会) それでは、会長は澤田委員、副会長については斎田委員にお願いいたします。

会長、副会長におかれましては、席の移動をお願いいたします。

それでは、澤田会長と斎田副会長から、それぞれ一言ずつごあいさつをいただきます。

(会長) 皆様、初めまして。小樽商科大学ビジネス創造センター教授で澤田芳郎と申します。大半の方には面識はございません。実は、私は当年4月1日に小樽商科大学に着任でございまして、このような懇談会の会長というのは、大変、大役と承知しております。あとでまた意見を申し上げる機会もあるかもしれませんが、皆様、力を合わせて一つの地域を創り出していくというおつもりでご参画いただければと、大変僣越な言い方ではございますけれども、会長という肩書きをいただいたからにはやむを得ません、申し上げますさせていただきます。ありがとうございます。

(副会長) 斎田でございます。小樽商工会議所の企画政策委員会の委員長としての立場で、副会長を仰せつかりました。澤田会長を補佐しながら、北後志の未来につながるようなビジョンの提案ができればと思っております。よろしくお願いいたします。

(委員紹介、事務局職員紹介)

## 6. 議事

(会長) それでは、議長を務めさせていただきます。皆様の積極的な発言を、どうぞよろしくお願いいたします。

議事に入る前に、一つだけお願いがあります。定住自立圏の形成につきましては、のちほど事務局からも説明があると思いますが、単に事業を行うということではなく、圏域内の市町村が連携して、それぞれの地域を強化しながら実現していくというものであります。従いまして、共生ビジョンの作成にあたり、皆様からご意見をいただきますけれども、そのとき自分の市町村の都合、利害ということではなくて、圏域としてどうあるべきか、どうすべきか、という面からご発言をよろしくお願いいたします。

というのが私の頂戴したシナリオに書いてあるとおりで、そのとおりだと思いましたが、もう一つだけ申し上げさせてください。この種の懇談会、審議会というのは、実は結論が決まっています、それをみんなで話し合った形を作るためにやる会議だと言われることがあります。私が知る範囲で、そういう面が往々にしてないことはないということも認めざるを得ないと思いますが、私たちの意見を行政官の方々が求めていらっしゃるという面もございます。さきほど皆さんに、地域を創る方向で考えましょうというご提案をさせていただきましたけれども、それは、利害や主張をやめてくださいという抑圧的なものではありません。皆様のお立場から、それぞれ十分にご発言をいただきながら、それを、小樽市を含む6市町村の行政官の方々がしっかり聞いて、その後の話し合いの中で私たちの意見が採用されていく。その意味では、私たちが、それこそ未来永劫にわたるこの地域のありかたについて、幾分かの責任を持つ立場にそれぞれなったということを意味いたします。皆様それぞれのお立場で存分にご意見をお話いただきまして、また今後の議論につなげていけばよろしいのではと思います。

ということで、ご意見もあるかもしれませんが、あとで皆様にご発言の機会もございますので、そのときにお考えをお話いただきまして、まずは、報告事項から入りたいと思います。

### (事務局説明 資料3～8)

(会長) 非常に具体性のある資料といたしましては、資料8「北しりべし定住自立圏における連携施策一覧」がありますが、さらにその前の資料7「中心市宣言書」の6ページ、周辺市町村との連携を強化する取組として小樽市が宣言していることの方に、より具体的なものも含まれています。これをさらに実現していくわけでありまして、その際に、個別にどのようなことをしていくかということはもちろん大事なことですけれども、その前に、共有できるビジョンを皆さんで作上げていこうと、こういうシチュエーションにあると思います。どのようなことでも結構ですので、ご質問があればと存じます。よろしくお願いいたします。

(委員) 資料3の「定住自立圏構想の概要」なんですけれども、日本全体の人口について2035年にはこういった傾向がでていくということですが、この圏域の2035年の予想される人口動態はどれくらいかということは出してもらえますでしょうか。

(事務局) 圏域全体の資料としては手元にはないんですけれども、小樽市は今が約13万人、これが10万人を切って8万人台くらいまでいくと想定されています。5町村の資料については持っていないのでご紹介できませんけれども、あとで調べましてお知らせしたいと思います。

(市長) 過去 10 年間では、圏域で 2 万人くらい減っています。

(会長) ほかにご質問ございませんか。

それでは続きまして、「北しりべし定住自立圏共生ビジョンの素案」をご説明いただきたいと思います。

(事務局説明 資料 9～10)

(司会) どうもご苦労様でした。あと約 1 時間ございます。私を含めて委員の出席が 16 名でございまして、これは事前にお伝えしているかと思えますけれども、一人 2 分ずつお話をいただけますと、議論の時間がだいぶ取れるのではないかと思います。大変恐れ入りますが、特に強いご意向によって発言はしないというお考えの方以外は、何らかのご発言を一人 2 分以内でお願いしたいと存じます。うんとコンデンスして、一番大事だと思うことをドカンと言うということで、順番によろしく願います。

(委員) 質問も含めてなんですが、構想の内容としてはだいたい理解できるんですけども、この連携の施策は、今現在、実際に連携していることをもう少し高めるような方向に持っていくということなのでしょうか。それとも、新たなものをここで作り上げるという必要性があるのでしょうか。

(事務局) 委員がおっしゃったように、今あるものを一緒にやって高めていくものもありますし、また、新たに行うというもので今年 4 月からの成年後見センターもありますし、両方あると思います。

(委員) 結局は、内容だけ見ますと、もうすでに行われている事業なわけですよ。医療からしますと、当然、北後志方向から患者さんたちは流れていらっやってますし、この地域全体の中の医療ということを考えるなら、実際に動いているわけですから。むしろ、5 町村がどういったことを小樽市に対して望んでいらっやるのかを、私としては知りたいなというのが、今のところの感想です。

(会長) 定住自立圏の総務省の構想は、実は、予算は出しません、呼びかけだけしていますということだと思います。予算は出しませんとはっきり言ってしまうと、総務省もお困りになると思うんですけども、そこらへんをちゃんとこちらが計画立案しないと、補助金の出しようもないということではないでしょうか。その点で、委員の言われた 5 町村の本音はどうかということですね。このあと順番に出るのではないかと思います。

(委員) 今、会長が言われたように、活動していくためには、やはりどうしても予算が必要ですよ。具体的な予算云々はきちっと出てくるのでしょうか。

(事務局) この定住自立圏構想におきましては、国が法律ではなく要綱で行っているということもありまして、たとえばこういう事業に対して他の補助金とか特定の財源が付いてくるというのは、基本的にはありません。ただ、人材育成とかそういうものに関しては、総務省の方で特別交付税を措置するというものもありますし、今回、中心市及び周辺市町村においては、規模、面積等を勘案して、ある程度、特別交付税を措置するということになっております。特定のこの事業

に対して補助金が付くという、そういう財源は基本的にはあまりないということになっています。

(会長) 答えにくければ答えにくいとおっしゃってくださって結構なんですけれども、特別交付税の規模、だいたいどれくらいの額だと予想されるのか、もし何かお持ちであればお願いしたいのですが。

(事務局) 中心市は、4千万円を基本として人口、面積、昼夜間比率、圏域の人口と面積等を含めて試算するという形になっております。周辺市町村におきましては、1千万円の特別交付税を措置するという形になっております。

(委員) 医療の場合はいろんなネットワーク化も進めなければならないと思うわけですが、具体的な費用は出ないということですね。たとえば、サーバーを置いて各町村からいろいろな情報を小樽に集めるための、具体的なネットワーク化のための予算云々は出ないということですね。

(市長) 定住自立圏構想における個別の事業では、特にないです。既存の補助金制度を活用してもいいですよということになると思います。

(会長) 委員のおっしゃったのは、いわゆる遠隔医療的イメージですか。ブロードバンドで医師同士が話し合いをしながらとか、そういうことが可能かどうかということですよ。

(委員) 今、市長がおっしゃったように、他にもそういう企画はあるんですよ。もしここでそういうものを利用したら、ほかのをやらないで、こちらの企画でやるのかなと思ったのですが。

(会長) そうなると恐らく、こういう規模にするにはどれくらいの設備が必要で、初期投資がいくらで、運用費がいくらという試算が出てくるとは思いますけれども、数千万円で何をやるかという、厳しいですよ。

(委員) 共生ビジョンを作る具体的なレベルですよ、一つは。方向性として抽象的な考え方があって、それをどうやってやるんだというところまで盛り込むのか、盛り込まないのか、それをどう考えるのかということ。もう一つは、さきほど委員がおっしゃったように、人と予算を具体的にどこまで落とし込むのか。何かをするときには必ず人と窓口、たとえば今、事務局が小樽市の企画政策室にある、各町村にもある。これを具体的に、医療から産業振興まで、体系的な部分をしっかりやっていかないといけないということ。もう一つは、実現可能などという部分に落とし込んだときに、数値目標に具体的に触れていかないと、結果として、何の検証もできないのではないかと。どのレベルまでの共生ビジョンの中身作りを求められているのか、この会議としてどこまでの提言が必要なのか。

(事務局) 具体的な取り組みをどこまで進めていくかということですが、実は、のちほど説明させていただきたいと思っておりますけれども、今回、当懇談会は18名で構成されています。いろいろな分野の方々に参加をいただいておりますので、この懇談会の中で具体的な取り組みについてお話をするのはなかなか難しいのではないかと考えております。提案をさせていただきますけれども、ワーキンググループを作りまして、その中で具体的な取り組みについてご協議をいただきたいと考えております。ですから今、この場面で申し上げますと、圏域の課題、あるいは将来像、目標というところについては、共通の認識をもっていただきたいということで、非常に大きな観

点からご議論いただいておりますけれども、実は、ワーキンググループの中で具体的な取り組みについてのご意見をいただきたいと考えております。

委員からお金についてのご質問がありました。具体的な案件が想定できませんので、直ちに今、私どももお答えすることはできませんけれども、具体的な取り組みが見えてくれば、どんな財源を使っていけるのか、そういった作業に入っていけるのではないかとというふうに考えています。これを進めるにあたりましては、今日、オブザーバーとして各町村の課長がお見えになっておりまして、私どもと一緒になりまして担当課長会議というものをもっておりますので、その中で人と予算の関係については事務的に議論させていただきたいと思っております。

数値目標についてのお尋ねがありました。この共生ビジョンの中に数値的な目標を掲げることはありませんけれども、確かに委員がおっしゃるとおり、目標を掲げて事業をやって、どれだけの費用対効果が出たのかを最終的に検証していかなければなりません。ビジョンについてはきまりがあって作っているのではなく、まったく任意の様式になっておりますので、把握ができるものについては、できる限り数値目標を掲げて最終的に検証を行っていければと考えております。

(委員) 私としては、今、お話を聞いて理解をしたうえで、ワーキンググループに今後、分かれたときに意見を述べるということで。まずは理解するということがよろしいでしょうか。

(事務局) まず、圏域にどんな課題があるのかを知っていただいて、それを解決するためにはどんな施策が必要なのか、そのためには圏内 6 市町村がどんな連携を組んでいくことが必要なのかということになってくるかと思えます。実は資料の 23 ページ以降が「具体的な取り組み」という構成になっており、ビジョンのこの部分をワーキンググループの中でご検討いただければというふうに考えております。すでに各自治体で行っている取り組みが書かれていますけれども、たぶんワーキンググループの中で、これ以外にこういうこともやったらどうだ、ああいうこともやったらどうだというご意見が出てくると思えます。そういったご意見もこの具体的な取り組みの中に反映し、最終的なビジョンとして取りまとめていきたいと考えております。

(会長) 質問という形をとると事務局がそつなく答える、というパターンで進んでいるんですけども、本当にそれでいいのでしょうかと、会長として問題提起させていただきたいと思えます。皆さんのお立場で、どちらかと言えばむちゃくちゃな意見を言っていたらうえて、それを法制度のもとでどう具体化するかは行政官の方がお考えになり、さらにそれをチェックするというのが、我々の役割ではないかと思うのですがいかがでしょうか。私の意見に過ぎませんけれども、このあとのご発言の参考にしていただければ幸いです。

(委員) このビジョン素案を今見て、ソツなくというか、きれいにできあがっていますが、これはこれで、できあがってみんなで拍手しておしまいというレベルもあるでしょうし、今おっしゃったようにもっと掘り下げるといいうのもあるでしょうし、そういう課題を背負っているのかなと思って聞いていました。私がこういう場面でよく思うのは、いちいちそのとおりなんだけど、だれがやるの、いつやるの、どうやってやるの、お金はどこから持ってくるのという、そこらへんをワーキンググループの中で少し掘り下げて、それを突きつけて、キャッチボールしながら走っていければ、少し実践的なことになるのかなと思ってます。どうせ一生懸命やるなら、ホンマもののというか、「よかったね、やって」という、そういう動きにしたいなと思ってますので、どうぞよろしくをお願いします。

(委員) 公共交通という立場でバス事業の現状を申し上げますと、規制緩和以降の地域の路線の維

持確保が今ネックになっている。小樽市以遠の補助金をいただいている路線のエリアで、利用者ニーズに合っていないものを走らせるのは意味がないと思います。ある自治体と懇談した中で、利用者ニーズなり、あるいは後志地域の紹介したいもの等、自治体から材料を出して欲しいと要望したことがある。定住圏構想の中ではそれらを踏まえて交通を私ども公共交通機関が考えるのか、懇談会として考えるのかということではないか。金は度外視するといっても人が乗らなければなかなか難しい。補助金やなんかで走ればいいんですが、それでは長続きしない。ある程度の受益者負担も含めて公共交通を維持していくという観点で考えていかないと難しいのではないかと思います。足が先なのか材料が先なのかということですが、足が先ではなかなか長続きしない、まずは材料が必要ではないかと考えていますので、地域の自治体の方から材料のご提案をいただいで考えてみたいというのが個人的なコメントです。

(会長) 確認ですが、材料という言葉が盛んにお使いになりますけれども、これは、たとえば産業の活性化によって交通の利用者が増加するような根拠、というような意味でよろしいでしょうか。

(委員) 産業振興の観点だけでなく、生活路線としての機能も当然、維持していかなければなりませんので、たとえば高齢者の方にこういうニーズがあるというのも、一つの材料と言えらと思います。

(委員) 今、後志管内の中小企業の方の落ち具合はちょっとやそつとじゃない。特に公共投資の関係が減り、ピーク時の約4割くらいになったことで、それに依存していたところがぐっと落ちちゃったんですね。それに関連する産業がみんな力がなくなってきてしまって、特に2年前のリーマンショックのあとの影響はものすごく大きいと思います。私ども中小企業の立場から、ものをつくる、それから売るという地産地消という観点で出てきているわけですがけれども、農業とか漁業の関係、中小企業の関係、特にものづくりの人たちを中心にして、人材育成を一生懸命やっています。今日、資料を拝見して、まず、この地域での共通認識に立つことが一番必要でないかなと思っています。

質問ですが、今までこれに似たような組織があつて、交流みたいなことはあつたのでしょうか。

(市長) 全体としての、個別の町村との協議というのはほとんどやられていないと思います。何点か、スポット的にやったものは結構ありますが、全体としてこの地域の振興策を協議した経過はございません。

(委員) もう一つ質問ですが、このゾーンが北後志に限られた背景はどういうことでしょうか。

(事務局) 今回、北後志5町村でこの圏域を組もうと考えたのは、さきほど資料の中にありましたけれども、ごみ焼却施設クリーンセンター、ごみの広域連合を組んでそういう生活に密着した取り組みをまず一緒に行っているというのがありましたので、まず北後志5町村で定住自立圏の圏域を設定しようという形を考えて取り組んだところです。

(委員) 皆さんの意見を聞いて、改めて設置要綱を見ながら自分なりに考えていたんですけど、この会の最終的な目的というのは、たぶんこのビジョンを作るところまでなのですね。その場合に、さきほど委員がおっしゃった数値目標まで組み込んだような具体的なものができるのかどうかということが一つですね。それを例にとつて、このビジョンのブレイクダウンのしかたをどこまで具体的にするのがまずあります。今、もしそのへんにお考えがあるのでしたらお聞きしたい。

それからもう一つ、この資料の 23 ページから具体的なことが書かれているんですが、この前提になっている前半のこの資料の中で大きく足りないんじゃないかと思われるのが、地域の中の人の交流とか、あるいはまちづくり団体の動きとか、いわゆる人が動いている向きというのが、この資料からは感じ取れなかったんです。私は小樽ですので、小樽で動いている方たちのことというのはわかるのですが、隣町にはどんな人がいてどんな団体があって、日ごろどんな活動をしているのかまったくわからない。やはりここにある「人、もの、情報が交流する」というキャッチフレーズが一番大事な部分だと思いますので、そういった人材の育成の前に人材の整備というのでしょうか、圏域内にいらっしゃる人材を皆さんで共有できるようなひとつの前提がほしいなとふうに思いました。それと関係があるのですが、さきほど委員がおっしゃったように、情報の共有というのは簡単に言ってもなかなかできないと思うんですね。小樽市がそういった地域のプラットフォームになるという考え方をもっと具体的に、たとえば今、小樽市が CMS という方法でホームページに全職員がアクセスできるような仕組みになっているそうですが、たとえば将来的に、もしできるのであれば、今の 6 市町村で共有の電子上のプラットフォームを持って、それぞれの情報が毎日のまちの変化とかあるいはイベントとか、あるいは今、農産物は何が採れているか、そういったものを地域の人が共有できるような、そういう仕組みとかそういう ICT のインフラ整備が必要なのかなというふうに思いました。

(会長) 貴重なアイデアをご提示いただいたのではないかと思います。打ち合わせしたうえで発言するわけではなくて、このあと私も修正を余儀なくされるかもしれないんですけども、この会の狙いとしては、やはりビジョンづくりがあります。問題はそのビジョンというのがどういうものであるのかということでありまして、ここは、仮に数値目標を組み込んだようなものでなければビジョンとしないということになれば、それをやっていかざるを得ないだろうと思います。一方で、実行主体が誰なのかを考えると、数値目標を掲げてそれに対して責任を持つ人を明確に定義できるのかという問題も出てくるかもしれません。合併をするならともかく、それは過去の経緯から考えると、しないことになっていると思うので、そこを抜きに数値目標となり得るのかどうかということも考えなければならぬのではないかと思います。要素もあるのではないのでしょうか。ビジョンのブレイクダウンのしかたをどうするかですけれども、将来的にどういうブレイクダウンをしていくことになるかというのは、将来に沿って考えなければならぬのですが、どちらかという、まずワーキンググループを作ってボトムアップでビジョンを作っていくと。その記録があとあとのブレイクダウンの参考になるという構造になっていくんじゃないかと思いますので、その点でもご協力をお願いしたいと考えた次第です。

(委員) 私は小樽で洋食屋をやってまして、余市町のトマトを使って小樽で農商工連携という農水省の認定を最初にいただいた事業を、実はやっております。余市町のトマトをうんと活用させていただきたいんですけど、あまりたくさん回していただけないで、今、仁木町の農家 4 軒ほどと一緒にやらせていただいています。今回、この会に参加してこれを見せていただいたときに、どれを最初にやるのかな、どれに力を入れてやるのかなと。全体のバランスとしては大変いろんなことが多岐にわたっているけれども、これを一度に全部ドンと動かすことはまず無理。まずは急いでこれをやりたいというような皆さんの意見というのが、ちょっと私にはわからなかった。ウチは個人の農家さんと個人のレストランでケチャップを作るという小さな結びつきなんですけれども、ウチ一つで小さな 6 次産業を実はやっているんだなというふうに思いながらやっております。そういうような小さなことから始めるのか、それとも大きなビジョンを持って、これを最優先させるというようなものを、皆さんお持ちのことはないのかなというのが、私の感想でした。



(会長) 農商工連携について、農水省のスキームを含めてもう少しご紹介いただければありがたいと思います。要するに農水省から補助金が出るんですよね。それはこれこれこういう新しい取り組みをするから補助金を付けてと言ったら、審査のうで補助金が付くという事業をやってらっしゃって、御社は余市町のトマトを使ってケチャップを作り、それをご自分の店を出して使っていると。

(委員) 一応、基本的には全国販売を目指していて、今、3省にお力添えを頂いておまして、農水省、経済産業省、中小企業庁の3省が認定からフォローアップまでのことすべてをやってくださっています。一応お金が出るのは経済産業省、認定してくださるのは農水省、事業の販路拡大のためにやってくださるのが中小企業庁というちょっと複雑な形態になっています。農水省から認定をいただいて、農商工連携に関しては試作開発と販路開拓の両方の側面を持った支援をしてくださっています。地域資源というもう一つの認定事業があるんですが、そちらの方は試作開発までしかしてくれない。一年やってみて思ったのは、販売する分と試作開発分をどうやって分けるのか、経理上でとても苦労したところだったのが、今年はラベルとかそういうものも中小企業基盤整備センターにご支援いただいて全国販売するというをやらせていただいています。

(委員) あまりにも分野が広くて、正直、肩の荷が重い気がします。私どもは、赤井川村で農業者だけが集まって農産物を関東圏の生協を中心に販売している会社です。北後志は環境に恵まれているし、北海道の縮図と言っていいほどいろいろな農水産物があり、非常に可能性に富んだところだと思っています。ところが残念ながら、各団体同士が手を結ぶ、あるいはどこかが中心になって一つのビジョンを描いていく、ということがあまりにもなさ過ぎるのではないかと。恵まれ過ぎていて、なさ過ぎるんじゃないかという気がしています。できればワーキンググループの中で具体的なことについて話し合っていければと思っていますが、いかんせん、短い時間と少ない回数の中でどれだけのことができるのかという気もしています。

(会長) 確かにスケジュール的には非常に厳しいものがあると思いますが、有志の方々になるべく頻度を高くして集まっていいただいて、それが第2回懇談会にご提言として出てくるという形をとっていただけると大変ありがたいなあと思っている次第です。

(委員) 私の場合、福祉部門ということで、大変僭越ですけども、さきほど事務局から細かく説明をいただいて時間切れとなった「成年後見センター」の立ち上げに2年程前から関わってきました。具体的には第4章の「成年後見センターの共存」というところですが、この4月に6市町村の行政と社会福祉協議会の合意に基づいて、小樽社協が実施主体となって立ち上げました。その背景には、後見人の第三者の不足があって、行政が実施主体になると、申し立てはできるが後見人にはなれない。それで、社協が法人後見を前提として立ち上げました。そういう中で、この事業が記載されている部分を見ると、小樽市が運営主体という表現も使ってますし、事業運営という言い方がされているんです。後見人不足を担うためのセンターとして立ち上げているものですから、実際、小樽市長が北後志5町村から受任を受けて小樽社協と協定を結んだ中身からすれば、事業運営ではなく事業支援という内容に見直し、あるいは委員の皆様方の共通認識が必要なのかなと思います。ワーキンググループの中で、私、改めて話をさせていただきますけれども、そういった既に取り組んでいるものと、新たに取り組む部分の中身の、ある意味、整合性みたいなものも必要になってくるのかなと考えています。

(委員) 結構気楽に考えていましたが、市長にまで来ていただいて、澤田会長には、ビジョンがで

きているのをただみんなが集まって話をするというのではうまくないよということで、今、非常に引き締まる思いがしています。たまたま私、余市町の人口問題検討特別委員会という委員会からの出向で、ちょうど内容的にはこのビジョンとほぼ似たような形の項目がございます。第一回目を1~2ヶ月ほど前に開催しまして、同じような流れでこれから話し合いをしていくということになります。余市町も2035年には1万5千人を切るだろうということで、そのへんを頭に入れながら話し合いをしていくことになると思います。あくまでも人口問題検討特別委員会は余市町内のことですが、こういう圏で物事を考えていくと、町だけでやるよりは、やり良いというか、いろいろ病院問題にしても仕事の問題にしても、非常にいい形で進めるのかなというふうにあらためて自覚しているところです。皆さんからたくさん良い意見が出てきたので、私の意見としてはないですけど、次回の懇談会では自分の意見を持って来ながら、最後にすばらしいビジョンになるように歯車のひとつになりたいなと考えています。

(会長) しつこく質問させていただきたいのですが、人口の自然増が望めない状況になったら、社会増するかというのは、だれでも考えることだと思います。これは北後志の問題というよりも日本全体の問題なのですが、外国人をもっと受け入れるかどうか、という意味が出てくると思うんですが、余市町の人口問題検討特別委員会でもお話になっていますか。

(委員) 今のところ外国人に関しての話までは進んでおりません。

(委員) 私、仁木町からです。出てきた団体は新おたる農協で、平成10年に積丹町、仁木町2つ、赤井川村、小樽市の5農協が合併した合併農協です。合併当時900戸近い組合員戸数があった中で、平成21年度末では520戸くらいの正組合員です。農業者と先ほど出ておりましたが、あれとは違った数字で、合併当時と比べて2/3の状況になっております。このような中で、さきほどから北後志の圏域ということで、当農協の目的と一緒にというか、農業振興が地域振興に繋がるといことだけは明確に皆さんに伝えていきたいと思います。さきほどの赤井川の二川さんも当農協の組合員ですけれども、最近、農協批判というのがたくさんあります。私も組合長の中では異例といいますか、自分で直販をやっております、観光農園をやっております。おそらく農協の組合長としては異端だと思います。当初、非常勤理事をやっていたあたりでも、そんなに農協の重要性というのは考えていなかったんですが、実際、今、農協の組合長という立場になりますと、今回の個別所得補償につきましても、おそらく農協がなければ、市町村も当然絡んだんですが、その事務手続きだとかは難しいと思います。個別補償が代表するように、農協がやっている事務手続きというのはものすごいんですね。実際に中に入ってみると、こんなことまでやっていたのかと。農協は悪者に言われていますが、市町村、組合員さんの意向を踏まえた中でやっているというのが実情なんです。今回、北後志という圏域が当農協の目的に合致いたしましたので、その点についていろいろ賛否ある中で、提案されたものについては、当農協といたしましても考えていきたいと思っています。

(会長) 是非、農業の立場から、北後志がどうあるべきかという大きなご提案を頂戴できる方向になるといいなと、今お話を伺いながら思いました。

(委員) 実際には後志には農協は4つございまして、ようてい農協という倶知安で9町村が合併した大きな農協と、それから共和町農協、あれも岩内町と共和町が合併した農協と、新おたると、それから余市町農協があります。実際、農家粗収入がようてい農協と共和町農協で2千万平均、新おたると余市町農協につきましても、農協の売り上げを組合員戸数で割り返しますと、売り上

げが平均 6 百万。可処分所得とは違います。いかに北後志の農業が小規模であるかということです。さきほど組合員戸数が減少したと話しましたが、第一条件が高齢化、実際には、そこに後継者が入って来ないという問題があります。これはちょっとした課題提起ということで受け止めていただきたいと思います。

(委員) こういうような取り組みは過去にあったらどうかという質問に対してですが、平成元年に、小樽は札幌圏を向いていて後志を向いていないのではないかと、そういうふうに思う人間が後志から集まりまして、喧々囂々意見を交わしたことがあります。二十数名集まりました。その中から、本当にわが町のこと、後志のこと、小樽のことを考える人間がいっぱい出て来ました。ニセコ町長だった逢坂も仲間ですし、今、町長をやっている片山健也、それと喜茂別町の菅原章嗣、ここにいる当時の仲間が余市町の盛課長、積丹町の播磨さんも。小樽にもたくさんいます。井上委員の息子さんの井上晃さん、新覚紘一、笹島進。そうそうたるメンバーがその当時集まって、後志を何とかしようじゃないかと考えたことがあります。そういう連中といまだに繋がっているような意見を交わしているんです。そういう人たちがいまだに活躍しているんですね。井上晃さんたちのグループが祝津で鯨番屋を修復しようとか、積丹町でも鯨番屋を修復しようとした成田静宏というのがいますね。そういうふうに、後志ではそういった意味でのネットワークが繋がっている。仁木ファームを造った坂東裕美というのもありますし、片山健也はニセコ町長をやっていますが赤井川出身で、彼ともしょっちゅう会って意見を交換しています。ですから、人の力が実現させることができるということになると、20 年経って、私も当時の仲間も 60 過ぎまして、僕以外は各町村で意見を、その当時描いた夢を、実現しています。そういった人たちともう一度ネットワークを組んでいくと非常に面白いかなと思います。それと、若松さんなんですが、偶然、3 週間前の土曜日に女房と何年ぶりかで食事をしまして、若松さんのところへ行きまして、そのあとのメールを見まして上石さんに聞いたら、産地で直送したものを使いたいということなので、私は障害のある子どもたちやらを集めて農業をやっております、石釜でパンを焼いたりしていますから、ぜひ今度、営業のお話をしたいと思っています。

(委員) みなさんからいろんなお話が出ておりますが、さきほど市長が端的に答えられたように、総括的にはこの圏域でこういう形で、単なる意見交換ではなく何か目標をもってやろうとしている、やろうとしたことは、僕の記憶にもそんなにないですから、せっかくの機会ですから、北後志の情報あるいは目標みたいなものをとにかく戦わせて、共有をどう図るかを一生懸命みんな考えて。そこから先が今日次々と言われたようなことなんですけれども、要は 6 市町村でどんなネットワークづくりが本当にできるのか。具体的なものに結びつかないビジョンを作っても、絵に描いた餅ではしょうがないんで、そのビジョンの先に繋がる、具体的な実践プログラムに繋がるようなビジョンづくりという想定でぜひ、まずはやりたいなど。最終的には、具体的に 6 市町村でのネットワークづくりをして、その中で、ビジョンの先に出てくるもの、いわゆる具体的な実践プログラムに結びつくような方向性をこの中で生み出せれば、この会を作った甲斐があると思いますし、そこらへんを想定しながら意見を出していければと思います。

(会長) ありがとうございます。最後に私が皆様方の意見をまとめて方向性を整理するかと言うと、とてもできるわけがありません。たきつけ方は若干、田原総一郎に似てると思いますが、何か困ったことがあったら「ハイ、CM いきましょう」と言って、あとは違う話し合いが進んでいるというのを、やりたくてもできない。もうここは皆さん、ご発言いただいたことをそれぞれワーキンググループに持ち込んでいただいて、さらにまとめていただければと思う次第です。ただ、今、斎田副会長がおしゃったことに若干引っ掛けて言うと、実践プログラムを作っていく方向の

議論は非常に重要だと思いますが、この懇談会においては、ビジョンを作らなければならないのです。ビジョンを作る方向でいろいろプログラムが出てきたら、それは皆さんご自身がお持ちになっている仲間たちとの交流を通して、実現に持っていく方向の市民運動でもなんでもやってみたら結構ですから、それを、より効率的に可能にする方向で、このビジョン作りに皆さんで力を合わせていただきたいと思いますし、お願いをしていきたいと考えております。

さて、おおむねワーキンググループ作りについてご賛同いただいていると思うんですが、どういうワーキングをいくつ作りましょうという何かアイデアございますか。事務局の方からまず頂きたいと思うんですけども。

(事務局) まず、資料 9 の定住自立圏共生ビジョンのスケジュールをごらんください。今日、第一回目の懇談会ということで、共通認識を持っていただきまして、この次、意見の集約としましてワーキングでの検討を2回から3回程度の開催を予定しております。ワーキングにおきましては、二つのグループを作る予定であります。まず一つは、産業振興・広域観光・地産地消でひとつのワーキングを作ります。そしてもう一つが、医療・福祉・教育・地域公共交通・交流・人材育成でひとつ。この二つのワーキンググループを作る予定であります。ワーキンググループのメンバーですが、まず、産業振興・広域観光・地産地消におかれましては、斎田委員、伊澤委員、三浦委員、赤間委員、井上委員、今日欠席の積丹町の播磨委員、山田委員、二川委員、若松委員にお願いをしたいと思っております。また、二つ目の医療・福祉・教育・地域公共交通・交流・人材育成におきましては、澤田委員、阿久津委員、並木委員、長川委員、岡田委員、小笠原委員、杉本委員、清水委員、佐々木委員にお願いをしたいと考えております。

(会長) 事務局案が出たわけですが、覆すなら今がチャンスですよ。誤解なく言っておきますが、ワーキンググループの数は二つでいいんでしょうかとか、今の分け方がちょっとイメージが違ふとかというご意見があれば、今、言ってしまうと、この懇談会の総意としてそれが認められれば、ワーキンググループの分割ということもあり得るんじゃないでしょうか。ちょっと、二つに分けるだけだったら、人数が多すぎないかなという感じが少しあります。最大4つで良かったいいんです。どうせ謝金は出ないんだから。そういう方向で何かご提案いただくことはございますでしょうか。ただし、特にご提案がなければ今の事務局案で進行させることになると思いますが、いかがでしょうか。

(委員) 共通の項目に興味や意見があるということがあると思うので、兼ねているという問題もあるので、交流してトークとか、人材の入れ替えとか、そういったことを図ってもいいかもしれないですね。

(会長) 確かにそういう考え方もありそうですね。そうすると、そういう、ややインフォーマルに、特に言いたいことがいっぱいある人が集まって言い合いっこする、結果的に全員集まったって構わないと思うんですけども、そういう第三ワーキングを作るというご提案だと思うんですけども、いかがでしょうか。

(委員) それは第三ですか。

(会長) 第三になると思うんですけど、今のところ。そうすると、この第三ワーキングに自分を出ようと思っていられる方がどなたかなのか、あるいは第一、第二ワーキングの議論の進行状況を見て第三をいつに設定しましょうかとか、そういうお話になってくるかと思うんですけど。

(委員) となりのワーキンググループが何をやっているかがわかるようにした方がいいですね。

(会長) たぶん、それがわかるようにするのが第三ワーキングの役割なんじゃないでしょうかね。このスケジュールからいくと、たぶん、となりのワーキングがなにをしているのかが分かるのが9月なんですね。仮にこの9月に、おもしろい想像をすれば、議論が紛糾してまとまらないと、そういうことになれば、ワーキングも懇談会も入り乱れて第三回をやりましょうということになるかもしれません。別に私がそうしたいと言っているわけではありません。「祭りですか」の声) 地域の将来的なことも考えれば、それは多少、祭りというか「まつりごと」的な要素は出てくるかもしれませんね。

(委員) さきほどおっしゃったのと、もしかしたら同じことなのかもしれないんですが、この中で、交流と人材育成に関しては1番の産業振興・広域観光・地産地消にも関わってくる部分で、いわゆる人のことですよね。そういう意味でワーキングは3つに分けてもいいのかなと言う気はするんですよね。あえて医療の方に行っちゃうと、並木先生もいて申し訳ないんですけど、「医療における」人材育成とか、あるいは「医療における」情報とか、そういうふうに変化してしまうんじゃないかという気がするんですよね。それは、産業振興にも広域観光にも地産地消にも、あらゆる面において、ここにキーワードとしてはないんですが、情報とか交流とか人材育成というのは必要になるのかなというふうに思います。

(会長) また新しい考え方が出てきたと思います。私の感想としては、①、②における②がインフラ整備。これは一つは、非常に重要な問題として医療がありましょうし、それからもう解決済みかもしれませんが、廃棄物処理場をどこにどれくらいの能力のものを造るのか、今のものでいいのか、そういったようなことになるのかもしれませんが。ただ、ワーキンググループが複数あって、それぞれ一部重なる議論をなさることはぜんぜん差し支えありませんので。それぞれグループでやっていただいたらいいんじゃないでしょうか。

(委員) ①、②とあまりに分野がたくさんある。たとえば医療、福祉、地域公共交通とは案外結びつきやすいような感じがするんですよ。その方がワーキンググループとしては話しやすいなあというような感じもするんですが。

(会長) 本当はもっと入り乱れてやりたいのですが、医療、福祉、公共交通のワーキンググループはまず一つを作るということにいたしましょうか。もう一つは、産業振興とおそらく観光ですね。産業振興の中に農業も入れましょうというご提案がさきほどあったと思います。さらに、産業振興と農業と観光をどう結び付けるかという議論もできてくるんじゃないでしょうか。なにか農業をバックグラウンドにした新しい、北後志としての観光資源の活性化といったような方向性をご議論いただけるということはよろしいんじゃないかと思います。さらに、人材育成という方向でもう一つワーキンググループを作るかどうかという点でいかがでしょうか。さらに言えば、複数のワーキンググループに所属してもいいですという形を作りつつ、なおかつ、第二回懇談会に向けた取りまとめのワーキンググループみたいなものを、各ワーキンググループの代表に、さらに事務局の方々と交えてやっていくと。私が今、言ったことを全部やろうと思ったら、ワーキンググループが4つできるんですけども、本当によろしいですか。もう一回、複数所属を前提として、必ず複数でなければならぬということではないと思いますけれども、自分はこのワーキンググループに属したいというご希望を、さっきの事務局案をリセットして、挙手をお願いできれ

ばと思います。まず、インフラ、医療・福祉・交通の点でいかがでしょうか。(5人) その次に産業振興・広域観光の部会についてご希望の挙手をお願いします。(10人) 人材育成の部会は。(3人) 私はお許しただけのら全部入りたいたいんですけども。しかし、全部出られるとは限らないので、ちょっと辛いなど。あともう一つ、4つ目のワーキンググループですが、各グループ代表の人が集まるようなワーキンググループ、ビジョン策定委員会のようなワーキンググループじゃないかと思うんですが、これについても各ワーキンググループで話し合っていて、どなたか必ず出ていただくと。重複の方もいらっしゃると思うので、その方はその方がいいんですけども、各ワーキンググループから必ず一人は出ていただくという形でお願いしたいと思います。この3つのワーキンググループ及び策定委員会に事務局からご参加になられることもありえますので、それはよろしくお願ひしたいと思います。場合によっては、6市町村の方々がお見えになるかもしれません。そういう人を議論に巻き込んでお考えを、はっきり言ったら吹き込んでいく。単に付けるのではなくて、行政には行政の知恵があり工夫があります。それをじっくり受け入れていただいて、より活力のあるご議論をお願ひできればなあと考えている次第です。あまり小樽市役所の方にご負担をかけるのも申し訳ないので、ワーキンググループの方で集まっていたいて、それぞれ、今度いつ集まろうというのを個別に決めていただくというふうにお願ひをしたいと思います。人数の少ないワーキングはまず第一回目のワーキングをいつやろうというのを決めていただいて解散するというところまでいきたいと思ひます。

## 7. 閉会